

いなばの白うさぎ

あるとき、たくさんの兄弟の神さまたちが、海辺を歩いていました。神さまたちは、いなばの国に美しいお姫さまがいると聞いて、結婚を申し込みにいくところでした。一番後ろを歩いているのは、オオクニヌシという神さまでした。オオクニヌシは、みんなの荷物を背負わされて、ついて歩いていました。

みんなが気多（けた）の岬まで来ると、うさぎが一匹、毛をぜんぶ抜かれてまるはだかであうずくまっています。兄弟の神さまたちは、うさぎに、

「おまえ、それじゃあたいへんだろう。こうすればいい。海に入って海の水でからだを洗うんだ。それから高い山のとっぺんで風に吹かれてごらん。すぐに治るから」といいました。

そこで、うさぎは、教えてもらったとおりに海の水でからだを洗い、山のとっぺんで横になりました。すると、からだがかわくにつれて、海の塩で皮がひび割れて、痛くて痛くたまりません。苦しくて泣いていると、オオクニヌシが、兄弟たちの一番後ろからやってきました。オオクニヌシは、うさぎに、

「おまえ、どうして泣いているんだ」とたずねました。うさぎは話しはじめました。

「わたしは、沖の島に住んでいるうさぎですが、いちど海をわたってこちらの岸に来てみたいと思いました。でも、渡る方法がないので、さめをだますことにしたのです。わたしは、さめに、「ぼくの一族ときみの一族と、どちらが多いか比べてみよう」ともちかけました。さめに、「きみたちが島から気多の岬まで並べば、ぼくがその背中の上を渡りながら、何匹いるか数えてあげよう」といったんです。さめはすぐに、一族をぜんぶ集めてきて並びました。わたしは、さめの背中を渡りながら数えていきました。そして、渡りおえてこちら岸に飛び移ったとき、つい、「やあい、だまされたな」といってしまいました。さめたちは怒って私をつかまえ、毛をみんな抜いてしまったのです。

そうやって泣いているところに、あなたの兄さんたちが通りかかって、海の水でからだを洗い、山のとっぺんで風に吹かれるといいと教えてくれたんです。そのとおりにしたら、皮がひび割れていたくてたまらなくて、こうして泣いているのです」

オオクニヌシは、それを聞くと、

「かわいそうに。大急ぎで川へ行つて真水でからだを洗うといいよ。そして、川岸に生えているガマの穂を摘んでまき散らして、その上をころがれば、元通りに治るよ」と、うさぎに教えてやりました。

うさぎが、オオクニヌシに教えられたとおりに川の水でからだを洗い、ガマの穂の上をころがると、からだはすっかりもとどおりになりました。うさぎはいいました。

「じつは、わたしは、いなばの白うさぎといって、うさぎの神です。あなたの兄さんたちは、決してお姫さまを手に入れることはできないでしょう。あなたは、荷物を背負つて賤しいなりをしているが、あなたこそ、お姫さまを得ることになるでしょう」

原話：『古事記 祝詞』日本古典文学大系／岩波書店

再話：村上郁

